



写真-1 石造アーチの八幡橋（平成30年4月撮影）

■ 賀集八幡神社参道脇に明治の文化遺産・石造アーチ橋

南あわじ市賀集八幡の国道28号・八幡（やはた）交差点から北へ主要地方道 31 号福良江井岩屋（ふくらえいいわや）線を約 250m 行った所に賀集八幡（かしゅうやはた）西交差点があり、左折して二級河川・山路川（やまじがわ）に架かる八幡橋（やわたばし）を渡ると賀集八幡（かしゅうはちまん）神社の鳥居が迎えてくれます。鳥居をくぐり参道を登っていくと本殿の手前左手に駐車場があり、その奥に石造アーチ橋が見えます。これが明治の文化遺産「八幡橋（やわたばし）」（写真-1）です。

元々この橋は四国街道が山路川を渡る所に架けられていた石造アーチ橋ですが、昭和 40 年災害により三原川水系大日川やその支川の新川、馬乗捨（うまのりすて）川、山路川等が氾濫し、災害復旧助成事業により改良復旧することになり、その事業に関連して当地に移築保存されたものです。

上の写真からわかるように、石造アーチ橋が架かっている溪流は山路川の左支川ですが、普段ほとんど水が流れていません。枯れ枝をかき分け溪床に降りて、何枚か写真を撮りました。アーチ部の上流側要石^{※1}（かなめいし）には鶴の陽刻^{※2}、鶴の顔が向く方向にある輪石（わいし）には亀の陽刻が施されていて、橋の長寿命を祈念したものと思われます。なのでこの橋は、別名「鶴亀橋」とも呼ばれています。

※1 要石：輪石で構成されるアーチ部の最頂部の部材で、要石を据え付けるとアーチが完成する。楔石（くさびいし）、拱頂石（こうちょうせき）、冠頂石（かんちょうせき）、キーストーンとも呼ばれる。



写真-2 賀集八幡神社入口の鳥居と参道



写真-3 賀集八幡神社の拝殿

※2 陽刻：文字・模様・画像が浮き出るようにした彫刻。

■ 豪農・印部喜与門が寄贈した石造アーチ橋

八幡橋の傍には南淡町（現・南あわじ市）教育委員会が設置した説明板があり、そこには下記のように記されています。

説明板に記されている「重要官道」とは、四国街道（別名・撫養街道）のことで、明石から淡路島を通して四国へ渡り、鳴門から吉野川の北岸を通り、阿波池田で徳島から来る阿波街道と合流し松山へ至る道です。現在、国道 28 号が四国街道の一部を承継しています。

明治初期、山路川に架かっていた板橋は、洪水の度に破損し通行に支障を来していました。小さな橋なのでおそらく自費請、つまり地元負担で復旧していたと思われます。その苦勞を見かねた八幡村の豪農・印部喜与門（いんべきよもん）が出水に耐えうる頑丈な石造アーチ橋の築造を思い立ったのでしょう。

使用された石材は、御影石 715 才^{※3} 合、青石 573 才 8 合、割石 411 個とされ、香川県小豆島の坂手と兵庫県飾磨郡家島町真浦（現・姫路市家島町真浦）から花崗岩を切り出して運んできています。

橋の側面には、上流面の鶴・亀の陽刻の他に、下流面の要石に「丸に四つ目菱」の陽刻が施されています。これは家紋の一種ですが、印部家の家紋なのでしょう。

また、高欄には「透かし雲形石」といって、松の枝葉をイメージした開口部が 10 個並列し、橋面には長さの異なる 2 種類の石を敷き並べています。側壁は、御影石の方形切石を布積みにし、輪石は 29 個の一重で環厚は 36cm、要石は通常より幅広いものとなっています。拱矢^{※4}（きょうし）は 3.2m です。

なお、親柱には「八幡橋」「明治十年十一月」と刻まれていて、橋体の竣工年月を示しています。

八幡橋 管理者 賀集八幡神社

橋柱なしのこのアーチ式の橋は、側面両側に鶴と亀を陽刻しあるので鶴亀橋とも呼ばれており、八幡村の豪農 印部喜与門によって造立寄贈された。

当時重要官道に架かっていた八幡橋が出水の度に破損、交通の途絶する事を憂い、私財を投じて播磨の家島と小豆島から石を運び、津名郡の井高政吉を石匠として明治 10 年 9 月 1 日着工、工事日数 137 日、工数延べ 1326 人を要し明治 11 年 1 月 17 日落成した。

諸経費のうち、県からの下付金は 67 円 91 銭 3 厘で、印部喜与門の負担は 619 円 40 銭 5 厘（当時の米価、1 石 4 円 80 銭）を要した。

この八幡橋も竣工後 93 年の昭和 45 年の改修で現在地に移転、明治の文化遺産として保存されている。

※総御影石造り太鼓橋（めがね橋）

石工	江井浦 井高政吉・井高金蔵
長さ	4 間半 (8.15m)
高さ	2 間 2 合 5 厘 (4.07m)
幅	2 間半 (4.53m)

（三原郡史より）

平成 11 年 3 月 南淡町教育委員会



写真-4 上流左岸側 輪石に亀の陽刻



写真-5 上流側要石に鶴の陽刻



写真-6 右岸側から八幡橋を撮影



写真-7 下流側要石に「丸に四つ目菱」の陽刻、上の高欄は透かし雲形石

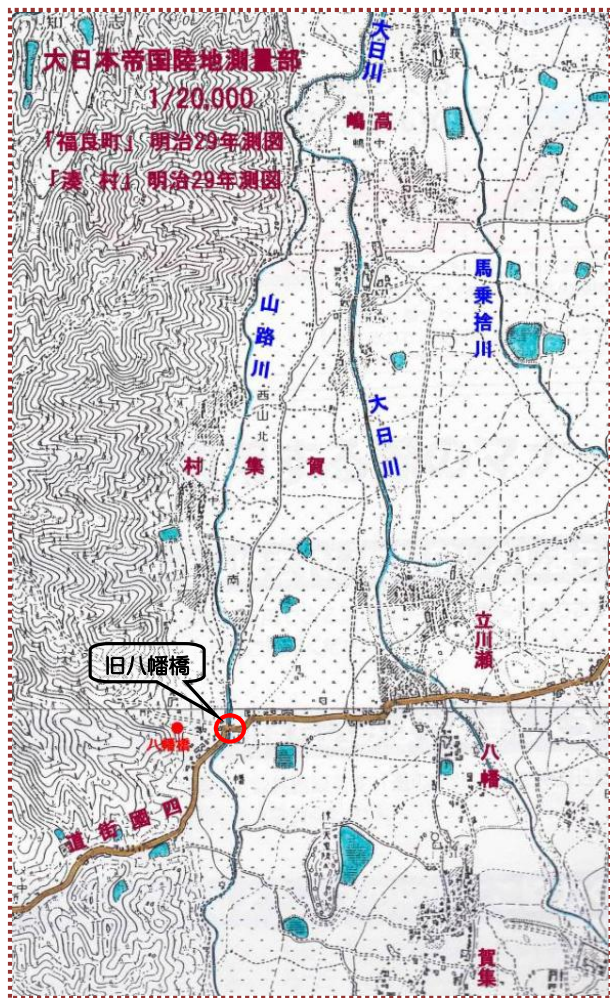


図-1 大日本帝国陸地測量部 1/20,000 明治 29 年測図

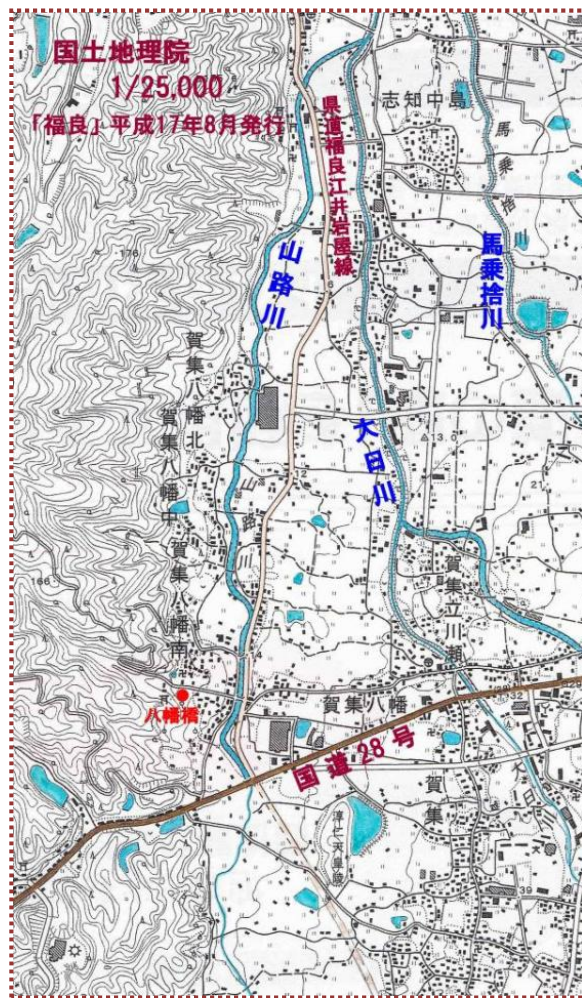


図-2 国土地理院 1/25,000 平成 17 年発行

- ※3 才(さい)：尺貫法の体積の基本単位で、船の積み荷や石材を量る場合には一辺 1 尺(≒0.30m)の立方体の体積(1 立方尺)を指す。
- ※4 拱矢：基礎(橋台)の上から要石の下までの距離(支保工の高さ)。「こうし」ともいう。

■ 昭和 40 年災害で山路川が被災、改修に伴い石造アーチ橋を移築保存

昭和 40 (1965) 年 9 月 10 日 8 時頃高知県に上陸した台風 23 号は、剣山を越えて 10 時 30 分過ぎに播磨灘から姫路市付近に再上陸、その後毎時 70km の速度で県中部を北上し、豊岡付近を通過して 12 時頃日本海に抜けました。総雨量(8 日~10 日)は、洲本で 144mm でした。

続いて太平洋を北上してきた台風 24 号は、本邦南岸沿いに停滞していた秋雨前線を刺激して、9 月 13 日夕方から 16 日にかけて県南、中、西部を中心に 300mm~800mm の豪雨をもたらしました。そして、超大型台風に発達しながら夕方志摩半島東部に上陸し、本土を縦断しました。総雨量(13 日 9 時~17 日 24 時)は、三原で 802.5mm を記録し、淡路全域(当時は 1 市 10 町)に災害救助法が適用されました。



写真-8 新八幡橋から八幡橋を望む



写真-9 新八幡橋から上流を望む

三原川水系においては、大日川支川の新川、馬乗捨川、山路川等で多大な被害が発生しました。そこで、これらの河川を災害復旧助成事業により改良復旧するとともに、三原川水系治水計画の見直しを行い、三原川の上流に諭鶴羽ダムを建設することになります。(昭和49年5月にダム本体工事が竣工)

山路川では、河川の拡幅による改良復旧を行うことになり、既設八幡橋は被災しませんが、拡幅に伴い架け替えすることになります。通常であれば、既設橋を取り壊し新たに橋を架けることになるのですが、当時、兵庫県土木部河川課におられたM大先輩の話によると、「この橋は先人が苦勞して架けた貴重な橋やから何としても残さなかん。だから、何度も建設省の防災課に説明に行ったもんや。」とのこと。災害査定の際には査定官が「石橋を細かく砕いて、護岸の裏栗石に使ったらどうや」などと言われたそうですが、「土工は、自分たちの大先輩が苦勞して造った石橋を砕くなんてできるはずがありません。」と言い張ったそうです。

粘り強く説明した甲斐あって石造アーチ橋は移築保存することになり、解体・運搬に係る費用は県が持ち、再築に係る費用は南淡町(現・南あわじ市)教育委員会が負担したと思われます。

■ 石造アーチ橋の傍らに芭蕉の句碑

石造アーチ橋の近くに芭蕉の句碑が建っています。傍らには、下記のような句の由緒が記されたパネルがあります。

これを読むと、芭蕉がこの地を訪れた際に詠んだ句のように思われますが、どうもそうではないようです。

筆者が、平成30(2018)年5月東京に行った際に、ついでに立ち寄った江東区の「芭蕉記念館」で芭蕉の足跡を示す地図を見ると、須磨や明石までは来ていますが淡路島には渡っていません。記念館の方に聴くと、「芭蕉は、淡路には行っていないはず。この句は芭蕉晩年の俳風である「軽み」の代表作で、お弟子さんや俳句愛好家が、芭蕉訪問の有無に関係なく句碑を建立しているケースがあるようです。」とのことでした(紛らわしいことはやめていただきたい!)



写真-10 石造アーチ橋の右手前に芭蕉句碑

芭蕉句碑由緒書
明治三十五年春建立

梅が香耳に

のつと日の出る

山路かな

者世越はせお

元禄六年、芭蕉五十才の昇春、俳諧行脚の途中、この鎮守に詣で、一夜を明かした。宴梅の楚々と咲き薫るこの山麓に立ち、東を望み野田山の辺りに悠然と昇る朝日をとらえて詠まれた句である。
(原文のまま)

平成二十二年春

寅卯会還暦記念

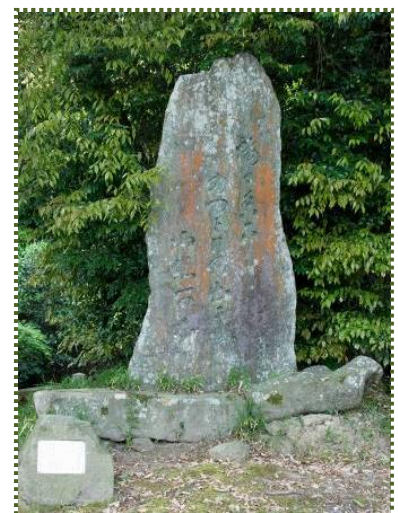


写真-11 芭蕉句碑(左手前が説明パネル)

ちなみに、芭蕉がこの句を詠んだのは元禄7(1694)年芭蕉最後の春と推定されています。俳諧撰集『炭俵』の冒頭を飾った名句で、主編者である志田野坡*5(やば)との両吟歌仙の立句(たてく:俳諧で、連句における発句)です。この頃芭蕉は江戸に居たようですが、5月に江戸を発ち伊賀上野へ向かいます。さらに9月、奈良を経て大坂へ赴きますが、そこで体調を崩し、10月12日御堂筋の花屋仁左衛門の貸座敷にて息を引き取りました。

※5 志田野坡: 江戸時代前期の俳諧師。両替商三井越後屋の番頭であったが、後に志して職業的俳諧師として生涯をおくる。蕉門十哲の一人とされ「軽み」の俳風では蕉門随一といわれた。

■ モノローグ

八幡橋は県内でも希少な石造アーチ橋で、石工が腕に縫(よ)りをかけて造り上げた秀作です。それだけに、人目につかない所にひっそり佇んでいるのが残念でなりません。加えて溪流には普段水が流れていないので絵になりません。多くの人の目に触れる場所を移築地に選定することはできなかったのでしょうか。周りに溜池はたくさんあるのに、八幡橋が架かる溪流は『水百景』なのに水がない。残念！！

ペラペラヨメナ (ペラペラ嫁菜)

キク科・ムカシヨモギ属の多年草で、中央アメリカを原産地とする。別名「ペラペラヒメジョオン」、「メキシコヒナギク」、「ゲンペイコギク(源平小菊)」、「ムキュウギク(無休菊)」。葉が薄く、ヨメナのような花を付けることから命名された。日本では、「源平小菊」(花が白から赤に変色することから)、「エリゲロン」の名で市販されている。草丈は20~40cm。頭状花が咲くが、花びらの色は白色から淡紅色に変色する。石垣の間などに生える。

山路川の石積護岸の目地に根を下ろして咲いていた。咲き始めはほぼ白一色だが、咲き進むにつれピンクの花色のものが出てくる。花は春から秋にかけて咲き、花期が長い。



写真-12 山路川の石積護岸の目地に根を下ろして咲いていたペラペラヨメナ

【参考資料】

- 1 『兵庫県の近代化遺産』 兵庫県教育委員会 平成18年3月
- 2 『三原郡誌』 兵庫県三原郡町村会 昭和54年
- 3 『兵庫の河川事業50年のあゆみ』 兵庫県土木部河川課 平成3年3月
- 4 『諸注評釈 新芭蕉俳句大成』 堀切実・田中善信・佐藤勝明 編 平成26年10月
- 5 『ペラペラヨメナ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成31(2019)年2月 『ひょうご水百景』No.93

改訂：令和8(2026)年4月 『ひょうご水百景』No.93